

菊池市隈府での振武特攻隊の写真

20230201版

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 高谷和生

1 写真所有者、撮影に至る状況等

(1) 写真所有者

- 所有者は、丸山順子さん（旧姓は松本さん・87歳）熊本市北区津浦町。敗戦時で丸山さんは碩台（せきだい）国民学校4年生、実家は藤崎宮近くの小児科院。父親は陸軍軍医学校卒業後に一時軍医も勤めていた。
- この証言内容の一部は、熊日新聞平成元年8月連載「セピア色の夏 碩台国民学校生の戦後」に、8月23日「白いハンカチ」として、紹介されている。

(2) 写真撮影に至る状況

- 6歳の時より日本舞踊を、菊池郡菊陽町の鈴木筆子さん（写真1では甲冑武者姿の中央。右隣は娘さん、左側は弟子）に学び、父親友人（外科医）の和田さんと娘さん・和田素子さん（現姓志垣）、高岡喜重子さん（現姓中野）と数回、菊地神社に拝殿した後に、隈府市内の料亭・旅館に「特攻隊への踊りの慰問」に出かけた。
- 写真1はその「慰問時」のもので、写真2は別日での「菊池神社参拝・集合時」のものである。
- 慰問先での写真1では、三人の子供中央が当事者の丸山さん、右側が友人の和田さん、左側が高岡さんである。また、菊地神社神楽殿前の写真2では、最上段の子供列の右から3番目が丸山さん、左から3番目が高岡さんで、和田さんが写っていないこと等から、2枚は別日での撮影と考えられる。
- 数回行った慰問では、踊りや歌・詩吟で南朝方の菊池氏を顕彰する創作舞踊「菊地尽忠記」「尽忠 菊地一族」等が定番で、自分たちは子供踊りを行った。歌は県民歌として制定された「菊地盡忠の歌」を歌っていた。
- 慰問後、出撃日には部隊全機が、藤崎宮近くの自宅上を数回旋回して、銀翼を輝かせて南に向かった。丸山さんは白いハンカチを振って両親と一緒に見送った。

(3) 写真の戦後

- 短冊を手に持った2枚の写真3・4は、慰問時にお礼としてもらった「6枚の短冊」を、50歳後半頃に写したものである。
- 慰問時に、6枚まとめて持参され、他の方々ももらわれたのではないかと。ただし、和田さん、高岡さんともに短冊受け取りの記憶はない。
- その後、短冊は供養のためお寺で護摩に伏した。
- 短冊文面は「純情 岡村中尉」、「来る年も来る年も 咲きて匂えよ桜花 われ亡きあとも大和島根に」「必沈□□」などである。



写真3・4 丸山さんと慰問時にもらった短冊 平成元年頃に撮影

2 撮影された振武隊の特定

(1) 振武隊・隊員の特定

- 振武隊の編成標準は12名であることから、2個部隊の集合と想定した。さらに短冊記銘の「岡村中尉」から、該当者は「第七六振武隊長の岡村博二（ひろじ）中尉」を特定し、出撃記録日が重なる第七七振武隊との合同部隊であると判断した。
- 写真1の右側部が「第七六振武隊員」で、中央部で和田さんを抱きかかえているのが「岡村博二部隊長」である。写真左側箇所が「第七七振武隊員」と想定できることから、部隊員各個人遺影等からできるが、図1で特定した。
- 写真1では、写真中央部踊り師範の3名から右側の振武隊員10人、民間人2日（丸山さん・和田さんの父親）、少女の和田さん・丸山さん・高岡さんの3名が

振武七六部隊、他が七七振武隊員10名の写真位置である。

(2) 部隊員、部隊の特攻攻撃

- 第七六振武隊は、昭和20年4月、第五十一教育飛行師団を持って編成された。第六航空軍付(九州)で、**部隊長は岡村博二(おかむらひろじ)中尉**である。
- **写真5**で、前列左より山口慶喜伍長、境忠軍曹、**岡村中尉**、木村廣秋少尉、垣尾幸男伍長。後列左より小島英雄伍長、中川芳穂伍長、鈴木啓之伍長、長谷川武弘伍長、久富基作少尉、戸沢政雄軍曹の**計11名**である。4月18日に本田保伍長は事故により殉職の為その後撮影と想定できる。後方は同部隊装備九七式戦闘機で、**尾翼に数字の「7と6を組み合わせたデザイン」白色の部隊マーク(写真18・19も参照)**が描かれている。
- **写真6**は、前掲写真と一連の撮影で、笑顔の同振武隊員と同基地逗留の他部隊員の集合写真である。岡村部隊長を中心とする前列構成の4名は変わらないが、後列の左側乗員が入れ替わる。死地に赴く部隊員の笑顔の姿に胸が苦しくなる。
- **写真7**は、第七六振武隊の出撃式において、杯・盃を受ける岡村博二部隊長である。以下5名の部隊員が見える。対面する人物は、同基地司令官であろうか。
- なお、4月18日に本田保伍長は事故により殉職。その後、木村廣秋少尉、垣尾幸男伍長は、5月14日在福岡とあり、出撃帰還後の振武寮入寮原隊復帰となる。
- **写真8**は、出撃前夜の知覧飛行場三角兵舎内での戸沢政雄軍曹、小島英雄伍長、久富基作少尉の3名(左側2～4番目の3名)と他部隊員(六五・七八振武隊)の姿である。慰問にもらった特攻人形を手は何を語っているのであろうか。
- **第五次航空総攻撃が行われた4月28日**、第七六振武隊は岡村中尉以下、境軍曹、長谷川伍長、山口伍長、中川伍長、鈴木伍長の6名が、16時50分に知覧飛行場発進し、嘉手納湾の敵艦船に向け特攻攻撃を行った。
- 続く5月11日の第七次航空総攻撃では、久富少尉、戸沢軍曹、小浜伍長の3機が加わり、16時41分に知覧飛行場を発進、嘉手納沖の米艦に突入した。



- 写真5 加古川飛行場での第76振武隊。4月18日以降の撮影。この場面での隊員は、本田伍長を除く11名
- 写真6 同飛行場での一連の撮影。笑顔の第76振武隊員と加古川飛行場逗留の他部隊員
- 写真7 第76振武隊の出撃式。杯を受けるのは岡村博二部隊長
- 写真8 知覧飛行場三角兵舎内での出撃前夜の第76振武隊と他部隊員
- 4月27日の撮影 写真5・6・8は知覧特攻平和会館、写真7は宮田逸民氏提供

(3) 第七六振武隊部隊長岡村博二中尉

- 岡村博二第七六振武隊長の軍歴は、資料1『第56期特別攻撃烈士銘々記』に示した通りである。生前の姿を伝聞した岡村中尉の姉・村上百合子さんの長男・「村上正一氏（東京都世田谷区経堂）」に証言聞き取りを行った。

□岡村家は広島市西区古江で、父親は銀行員。家族は長男・姉3人、博二さんの5人兄弟で、年齢が近かった3番目の姉・村上百合子さんが最も親しかったという。

- 温厚な性格で、勉強も良くでき、広島師範学校附属中学に進んだあと、何故が陸軍広島幼年学校へと転校し、その後は軍人の道に進んだ。その契機・いきさつは聞いていない。
- ご遺族の村上正一氏証言では、遺作「尊皇」書は、古くから村上家の自宅にあり、母親の村上百合子さんと姉の明子（あきこ・現姓鶴丸）さんが、父親の物故を機に、知覧まで持参し、寄贈したものである。
- 一方、寄せ書きハンカチ「振武」は初めて見るもので、村上家にあったものではない。広島の岡村家で所蔵していたものではなかろうか。また「捨生執義…」は未確認である。

(4) 岡村博二中尉の遺品

- 写真9の「第七六振武隊寄せ書きハンカチ「振武」①」は、約20cm方形・絹製白色ハンカチへ部隊員11名の唐傘記銘の資料である。中央文字は「振武」で、「純情一徹 隊長岡村中尉」銘は、右上の斜文字として記される。知覧特攻平和会館には、同一ハンカチがもう1点展示され、これは同隊境忠軍曹のご遺族からの寄贈である。
- 写真10は、岡村中尉「捨生執義…」遺作である。25×20cm方形のふすま紙へ「捨生執義 尚名節重廉恥 陸軍中尉岡村博二」銘である。
- 写真11は、岡村中尉「尊皇 振武第七六隊長 陸軍中尉岡村博二 花押」遺作である。美濃市四つ折りでの額装となる。

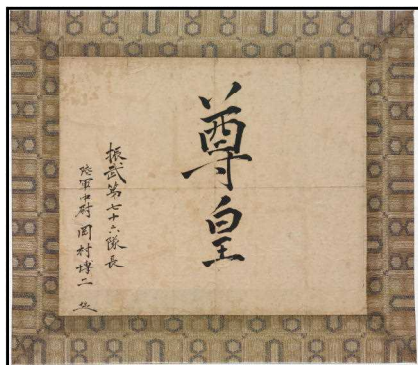
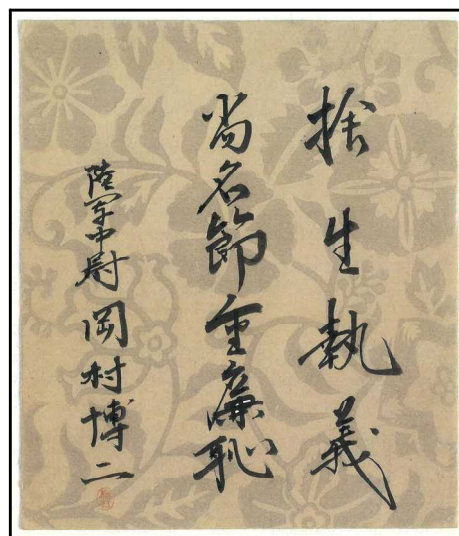
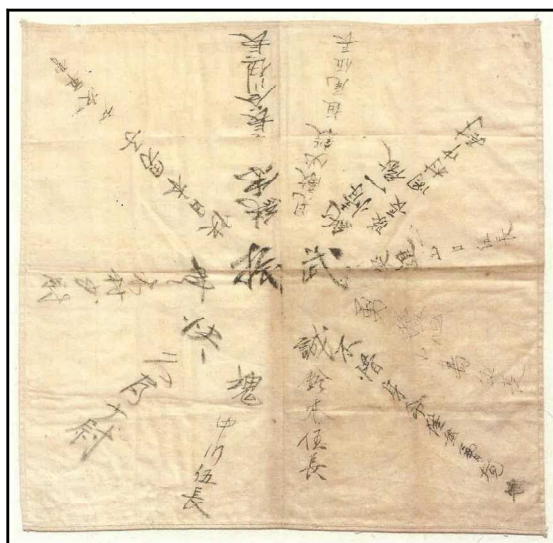


写真9 第七六振武隊寄せ書きハンカチ「振武」①

岡村中尉は右斜め上「純情一徹」銘
写真10 岡村中尉「捨生執義 尚名節重廉恥」銘の遺作

写真11 岡村中尉「尊皇」遺作

写真9・10・11は知覧特攻平和開館所蔵、ご遺族村上正一氏提供

3 証言

(1) 菊地神社禰宜「前田澄輝さん」の証言

- 写真2は、菊地神社「神楽殿前」西側に集合したものである。背面には、神楽殿舞台には幕がかかり、幕には神社「並び鷹の羽紋」が描かれている。また、写真左側には摂社「城山神社」の屋根部等が見える。
- 写真中央は「第十代宮司 中島 仰（なかしまあおぐ）氏」で、在任は昭和9年3月から昭和20年10月まで任期である。他1名も神社神職と想定できる。
- 菊地神社には、早朝よりの神事の為、前日よりお籠もりをする「齋館（さいかん）」と呼ばれる部屋がある。額や長槍などが飾られている部屋だが、全員が入るには狭い様に感じる。



写真12 第十代宮司の中島仰氏の就任時写真
写真13 菊地神社神楽殿の西側からの全景

(2) 三人の少女「和田素子さん」の証言

- 和田素子さん。当時は国民学校4年生であり、熊本市北区在住。
- 当時外科医であった父親同士の縁で、丸山さんと一緒に慰問の踊りにでかけた。
- 写真1の場所は、大きな料亭の様な建物で、広い畳敷きの部屋中央で踊った。周りには一人ずつのお膳が用意され、当時びっくりするような豪華な食事で、酒も用意されてあった。写真後列の右端が父親である。抱っこされた岡村博二少尉の記憶は特段にはない。
- 父親がもらったのか、写真1と同じ写真が実家に残されている。だが短冊はない。
- 菊地神社神楽殿前の写真2には自分写っていない。別日ではあろう。

(3) 三人の少女「高岡喜重子さん」の証言

- 高岡喜恵子さん（現姓は中野さん）、熊本市北区植木町在住
- 父親は内科・小児科の開業医であった。当時は尚絅高等女学校1年で、妹と一緒に叔母に連れられ各所の慰問に出かけた。ただし菊地慰問の当日は体調が悪く、大きな居間で踊ったことしか覚えていない。
- 県民歌として制定された「菊地盡忠（じんちゅう）の歌」を口ずさみ、この歌に併せて踊った記憶がある。



写真14 丸山さん自宅での和田さん（前列右側）
写真15 菊地神社神楽殿西側前の丸山さん（右側）
と高岡さん（左側）

(4) 小池征一さんの証言

- 小池征一さん（89歳）敗戦時は、国民学校6年生で、実家は酒蔵で清酒「菊源」を造っていた。
- 実家の近くに料亭「菊栄館（きくえいかん）支店」があり、そこには沢山の特攻隊員が宿泊していたのを見た。**
- 当時の隈府では「菊栄館本館、菊富士旅館等の数軒しか多人数が泊まる場所はなく、写真での部屋しつらえ等から“菊栄館支店”ではないか」と思う。



写真16 菊栄館支店跡地を案内する小池征一さん

写真17 隈府出端通り「菊栄館」前の様子 昭和27年6月撮影

菊地中央図書館デジタルアーカイブス 菊地dokosaより

4 まとめ

- (1) 写真1の撮影は、証言等から隈府市内の料亭・旅館「菊栄館支店」と想定できる。撮影日は知覧基地出撃前夜までの期間、4月18日～27日までとなり、部隊移動の日数を勘案すると、**4月25日前後の撮影**と想定できる。
- (2) 部隊への慰問については、同部隊久富基作少尉の記録に、次の様な記述が見られる。本慰問写真等と関係するのかもしれない。**「或日熊本師団の報道部から熊本演技挺身隊員の慰問あり」**、「熊本市の水道町の加地病院の院長、加地八郎氏と知り合いになった」
- (3) 特攻隊の中継基地として利用された陸軍菊地飛行場では、**部隊名が確認された当地で撮影された「初めての特攻振武隊の写真」**となる。菊池慰問写真では七六振武隊は11名、特攻散華死9名、振武寮への原隊復帰2名。七七振武隊は慰問写真、特攻散華死ともに10名である。
- (4) なお、知覧飛行場があった南九州市知覧町では、フィールドミュージアム整備の一環として、整備のための発掘調査が行われた「はと地区の無蓋掩体壕」に、**本第76振武隊機のカラーリングを施した「九七式戦闘機（FRP製原寸大）」が屋外展示**されている。
- (5) 本写真資料と第七六振武隊、部隊長岡村博二中尉を記した**啓発リーフレット『菊池の空から II（仮）』**を、令和5年度に刊行する予定である。

なお、本報告の作成にあたっては、岡村博二中尉のご遺族村上正一様をはじめ、以下の方々から資料提供、証言等をいただいた記して感謝申し上げます。丸山順子（旧姓松本）、和田素子（現姓志垣）、高岡喜恵子（現姓中野）、小池征一、知覧特攻平和会館、八巻 聡、熊川果穂、恒松聡美、菊池神社、岩永明、宮田逸民

順不動・敬称略



連絡先
くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷 和生
個人携帯 090-1513-5528
Eメール takayanagi912@yahoo.co.jp
HP URL <http://www.kumamoto-senseki.net/>



写真1 限府の慰問先での丸山さん方慰問団と第七六・七七振武隊員
 ※写真前列中央の少女が和田素子さんと七六部隊長・岡村博二中尉、その左が丸山順子さんと七六副部隊長・久富甚昨少尉、さらに左が高岡喜恵子さんと木村廣秋少尉



図1 丸山さん方等慰問団と第76・77振武隊員の特定



写真 2 菊地神社拝殿前での慰問団と神社関係者との集合
※最後列の左から 3 人目が高岡さん、右から 3 人目が丸山さん

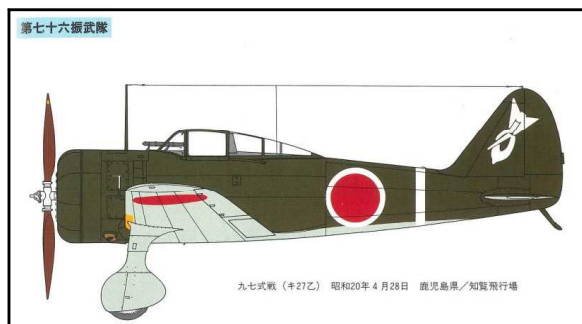


写真 1 8 知覧飛行場の掩体壕屋外施設での第 7 6 振武隊展示機
写真 1 9 部隊カラーリング。本機は隊長の岡村中尉搭乗機
写真 2 0 陸軍九七式戦闘機実機 筑前町立大刀洗平和資料館蔵

表1 岡村博二（おかむらひろじ）中尉軍歴 等
『第56期特別攻撃烈士銘々記』より 知覧特攻平和会館提供

☆ 岡村 博二

大正11年4月27日生。広島県出身、広島高師付属中、広幼、予科2-3。11戦隊（満州の哈爾濱、戦闘）付士官候補生、航士6-4。明校（戦闘乙学）、戦闘操縦。陸軍中尉。

昭和18, 11, 20, 明校付。

- “ 19, 2, 20, 48戦隊付となり、近藤哲也、二瓶正喜、堀英男、山本武寿の同期生4名と共に、満州の延吉に赴任した。
- “ 19, 4, 29, 48戦隊は湘桂作戦参加の為、中シナ方面に出動したが、岡村中尉は、満州の部隊に残留したと察せらる。
- “ 20, 3, 1, 第6航空軍司令部（福岡）付、特別攻撃隊「第76振武隊」隊長。即日編成完結。装備は97戦12機。
- “ 20, 4, 28, 16時50分、岡村中尉以下6機の97戦の特別攻撃機は知覧飛行場を離陸し、沖縄近海洋上の敵艦船に体当たり攻撃を実施して散華。岡村博二の享年は、23年と1日。陸軍少佐に昇任。

『修武台精神』

『留魂録』雄叫び：「生を捨て義を執り、名節を尚び、廉恥を重んずる伝統的士風」、この大文字六十年の先輩が、血汐より発せられたる雄叫。市ヶ谷台精神を離れては修武台の伝統は有り得るものでない。修武台精神は飽く迄市ヶ谷台上に於て、吾々の享けたこの伝統精神を根幹とし、之を延長し、更に之を一步推し進めたものでなければならぬ。

『遺詠』：いつの世も 国守るものは 若人の止むにやまれぬ大和魂

『支那大陸打通作戦参加、そして一転・沖縄の米艦船に突入散華！』

56期戦闘は明野の乙学終了時、195名が大別して作戦要員に136教育関係59と分けられた。前者のうち赴任戦隊等行く先の決まった者を除く71名は、明野本校・天竜等で更に技量の研鑽に勤め赴任命令を待つ事になった。その中に岡村がいた。彼が48戦隊付きになるまで略3ヶ月明校付きで居たわけで、技量向上はさぞかし目覚ましく、最新鋭戦闘機を駆っての自由奔放な自己訓練は、回を重ねる毎に大きな自信を生んだ事であろう。

48戦隊付きとなり、同期生4名と共に満洲・間島飛行場出発、4月末武昌飛行場着、部隊は第五飛行団に編入された。間もなく“大陸打通作戦・湘桂作戦発動さる。”爾後約一年、大陸各地で戦闘が続き、航空部隊は戦果を挙げつつも多くの損害もまた被らざるを得なかった。大陸の戦闘は終りが見えない。48戦隊の同期生5名は6-6近藤哲也、6-26二瓶正喜、8-8山本武寿といずれも戦死、堀と岡村の活躍は報ぜられていない。19年8月10日には明野教導飛行師団から中島欣也が着任、その後中隊長を拝命している。

20年3月1日付けで岡村は第6航空軍指令部付、特別攻撃隊長「第76振武隊」として重責を担う。即日編成完結、装備は97戦12機なりと。4月28日沖縄近海の米艦船に突入、少佐に昇任。戦力甲に成長している筈の岡村博二には“本土決戦・全軍特攻”の場で4式戦“疾風”を駆使して先頭を切って貰う筈では無かったのだろうか。